

南日本の衣料について(第3報)

— 芭蕉の朝衣(官服) —

小林孝子

A Study on Clothing in Southern Japan (Report 3)

Chogin (Official Uniform) made of Bashofu

Takako KOBAYASHI

I. はしがき

奄美の芭蕉布の採集・紡織，および仕事着についてはすでに報告した¹⁾²⁾が，今回は芭蕉の朝衣について報告する。朝衣とは混効験集(1711)に「ちやうぎぬ 朝衣 三司官以下束帯之時着之四時用之」とあるように官服の意である。筒袖短衣の仕事着の形態は南島独自のものではなく，葛布・藤布などと材料は異っても，古来仕事着として日本各地に共通の形態であるが，朝衣は琉球服制の導入と考えられる。理由は慶長十四年以降も薩藩は，道之島(大隅国大島郡に編入された諸島)の島民に対して内地風の服装・名前等を禁じ，島民が上国した場合にも和装を禁じて，衣服・髻形は琉球風としていたからである。従って今回は琉球の文献を参照しつつ，奄美の朝衣について検討を試みたいと思う。

II. 文献にあらわれた朝衣

伊波普猷氏は「琉球国由来記は，清の康熙五十二年(我が正徳三年)琉球王尚敬の命によって編纂されたもので，琉球の延喜式とも云ふべきものである……」と述べ，東恩納寛淳氏は「……中山世鑑は琉球最初の正史である……。世鑑が古事記に当り，由来記・旧記が，風土記に当る，ものとしたならば，球陽は当さに書紀に当るものと見るべきであらう。」と述べているので，17世紀半ばと18世紀につくられたこれら琉球の史書を参考とする。

1. 中山世鑑卷二

洪武五年壬子，中山王察度・山南王承察度・山北王帕尼芝，皆遣使，奉表箋，貢方物。

其貢物ハ，馬・刀・金銀酒海……生熟夏布・牛皮・降香……。此数十数種ナリ。是レ進貢ノ始也。

2. 琉球国由来記卷三 衣服

尚豊王世代，或人，大綠色衣着。王看之，其色光輝而花美也。故有詔，定王子・按司朝服也。(練蕉布之単衣也)四季用之也。大青朝衣，親方以下朝衣也。玉色朝衣，諸間切掟・目指，家来赤頭・諸細工朝服。

3. 同 卷四 蕉布

当国蕉布，従上古有之哉，不可考。是，我国女功之貨物也。洪武五年壬子，中山王察度・山北王怕尼芝・山南王承察度，大明皇帝ニ貢方物。件ノ中，生熟夏布ト有り。疑クハ是蕉布也歟。(見中山世鑑)

4. 琉球国旧記卷之四 衣

天孫氏之世。取蕉麻類。成布造衣。……尚豊王世代……皆服月白朝服。四季皆用練蕉布之単衣也。

5. 球陽卷之六

尚質王，即位元年(1648)始メテ芭蕉当職ヲ置ク。モト芭蕉当ト称ス。後ニ奉行ト称ス。イマ仍ホ称シテ旧ノ如シ。

以上琉球では，朝衣に練蕉布が用いられたことがうかがわれる。

現代の記録では，八重山生活誌が，「チョーキン(朝衣)は官職にある上級士分の着る芭蕉布又は芋布の黒の長衣である。袖丈は七十六センチ程の広袖。身巾は一ぱい。衿幅十五センチ(表に折つて着ける)。大帯は幅二十七センチ内外，長さ四メートル程もあったようである。この朝衣と大帯は結婚式の礼装として明治の頃まで使用されたものである。……大筆者以上は黒朝衣，脇目差から目差は水色朝衣……」と記している。

奄美においては南島雑話³⁾が「朝衣といへる官朝あり。極上々の芭蕉素を以て，至て細密に績たるを，素の儘に数篇藍にて五日計り飽まで染て織調へ，類族集りて替る々々擣衣する事二三昼夜なり。成就になりたるは，其光沢恰も靱目が如し。是を広袖の大礼衣服に縫調へ，広帯をするなり。……此服は，郷土格，与人，間切横目の分，着するなり。……地合，絹芭蕉にて製す。……朝衣惣長，常服より二寸程長し。……」と伝えている。



図 1



図 2



図 3



図 4

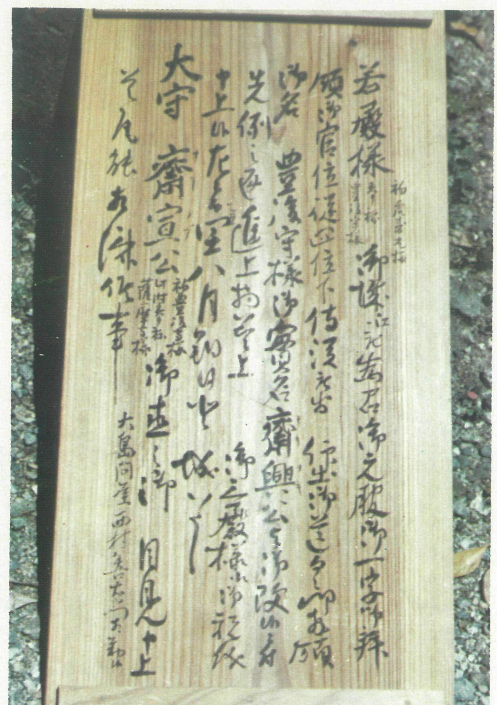


図 5

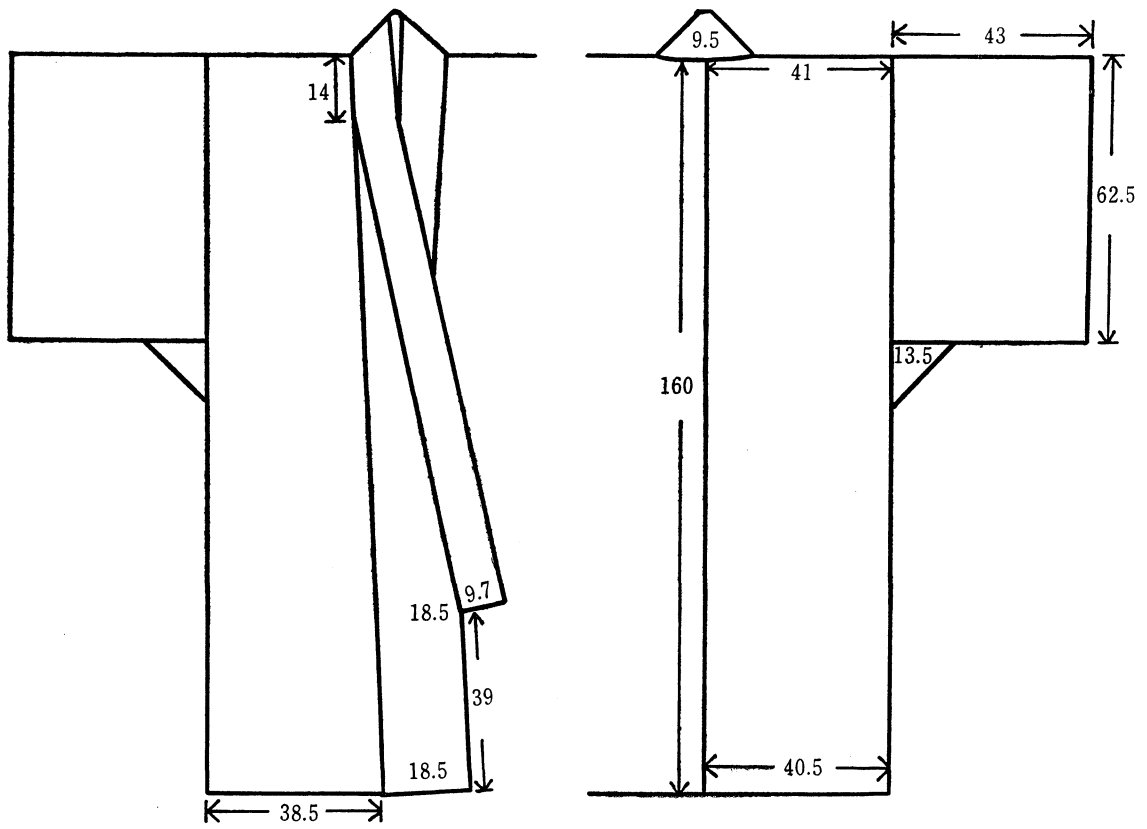


図 6

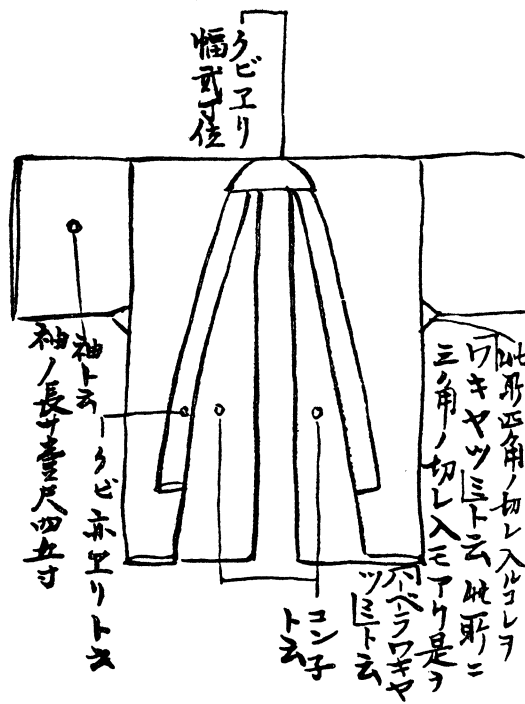


図 7

III. 奄美の朝衣

図1は名瀬市小宿の位置で、図2・3は小宿の大津家に伝わる広袖朝衣である。図4は箱の蓋表面の図で、文化二年、大島倭浜方与人佐和郁の御目見衣装の朝衣と広帯であることが認められるが、広帯は残されてはいない。図5は蓋の裏面で、島津斎興元服の祝儀に上国し登城した際着用したことを記している。

図6はこの広袖朝衣の実測図で、図7は南島雑話の朝衣の図である。文化と嘉永約50年の隔りはあるが、幕末における奄美の朝衣として同種のものと考えてよからう。図2・3の朝衣の色は黒紺で強い光沢がある。布巾は43.5cm、織密度は1cm間隔に経糸20本、緯糸18本で細密である。

図8は実測に基いた朝衣の裁断予想図である。

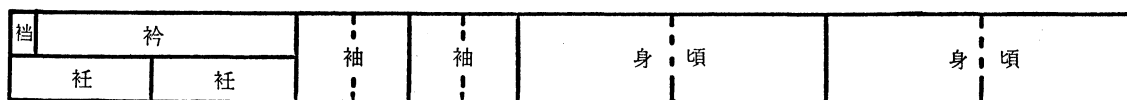


図 8

IV. 朝衣・蕉布に関するクェーナ、オモロ

クェーナとは「くわいにや、こゑにや」などと呼ばれて、沖縄本島および沖縄島周辺の離島で謡われていた古謡である。第1報⁴⁾において引用した奄美古謡「芭蕉流れ」は、母親が愛し子に着せる芭蕉布作りの工程をうたったものであったが、この「うりずみごゑにや」は、……大和むぢの御公事美衣……とあるように、朝衣をつくる工程をうたいあげたものとしてここに引用する。

うりづみかはつが芋

若夏が真肌芋

真竹くだつくて

真竹いやびつくて

尾花がたひきぢゃち

ばらむがた拔出ち

大和からくたゆる

かねの輪のみをぐち

御側ひき寄て

御前に引寄て

はたいむ芋やうみむぢ

むすむ芋やうみむぢ

つみなかひつむぢ

ウリジン（初夏）が初芋

若夏が真肌芋

真竹籬竿作り

真竹いやび作りて

尾花（すすきの穂）形引き出し

ばらむ（すすき）形拔出し

大和から下ゆる

金属の輪の糸入を

御側引き寄て

御前に引き寄て

廿読の芋をつむいで

卅読の芋をつむいで

紡車につむぎ

わくなかひくゆけて	わくにつむぎ
よかる日よいらで	良かる日は選び
まさる日よ拔出ち	勝る日は抜き出し
十尋かせかけて	十尋総掛けて
八尋かせかけて	八尋総掛けて
<u>はたいむふどち</u> のちゆけて	廿読箆に貫きて
<u>むすむふどち</u> のちゆけて	卅読箆に貫きて
まきぢゃなかひ巻ちゆけて	巻板に巻きつけて
布機に置ちゆけて	布機に置きて
白糸びやかかけて	白糸の綜統に掛けて
赤糸びやかかけて	赤糸の綜統に掛けて
いなやうかしちうちゆさ	早やもう 織り初めたよ
しちゆいしちゆいおやがて	パタンパタン織りに織り
みぢゃの日に布なか	三日の日に布中
四日の日におりむち	四日の日に織り満ちて
すむかはにすまち	清む井泉に澄まし
あさがはにゆすぢ 十尋竿にさげて	朝の井泉に濯ぎ十尋竿にさげて
八尋竿にさげて いなやうしみしな	八尋竿にさげて 早やもう湿
ゆさ	すようになつて
いちゆたくびたくで	丁寧に畳み畳んで
<u>中巻にからまち</u>	中巻に巻きつけ
<u>いぢゃぶなかひ置ゆけて</u>	砧に置いて
<u>さらひさらひにやがて</u>	さらいさらいに練り上つて
しちゆいしちゆいにやがて	しちゆいしちゆいに練り上つて
よかる日よいらで	良かる日は選び
まさる日よぬき出ちおみなひた揃て	勝る日は抜き出し 姉妹達が揃いて
親加那志御側をて <u>かしちから身な</u>	親加那志御側で織り初め(かしち)
<u>げとて</u>	から身ごろをとつて
<u>真中や美袖とて ちむみゝやみふすもの</u>	真中はみ袖をとつて 後織りからは
<u>こむねかた截し出ち</u>	衿やおくみの形を截し出して
某里之子が	某の里之子が
大和むぢの御公事美衣	大和行きの御公事御衣
うり召せうち里之子	それを召されて里之子が
百二十歳のお願	百二十歳の長寿のお願い

あやざねみるぎゃでも
 白さばねみるまで
 御願しゅらは あむぢゅあるどう
 願て居らは たむぢゅあるどう

綾に美しい羽がはえるまでも
 純白に美しい羽がはえるまでも
 御願いをしたならばその通りになるよ
 願っていたならば その通りになるよ

以上、傍線を附した部分によって、細い糸をつくって細密に織り上げ、念入りに擣衣した布を裁断する順序がうかがわれる。

奄美の朝衣も「其光沢恰も^{まばゆき}観目が如し……」と強い光沢があって、「擣衣(図9)する事二三昼夜なり」と記しているが、図9によれば、砧を「ネリバン」と称したことが認められる。これによって、練蕉布とは芭蕉布を砧で擣って光沢を出したものであることが確かめられる。

一般に沖縄の万葉集ともいわれるおもろさうしは、沖縄最古の歌謡集である。五、六世紀から十七世紀に至るオモロ(1554首)の中から、織布に関するものを引用する。

- 349 ……又 聞得大君ぎや
おれつむが 立てば
白衣御衣 みおやせれ……
- 847 ……聞ゑあけしのが
斎場獄 降れわちへ
蜻蛉御衣 召しよわちへ……
- 983 ……又 初幹が
したしらひよは 選で
又 たち選びに
筋選びに 選で
又 二十読は
三十読は 為ちへおちへ……
- 514 ……芋の糸 真腹帯……
- 552 ……又芋の糸は
(855)
もで合わし遣り 水縄せ

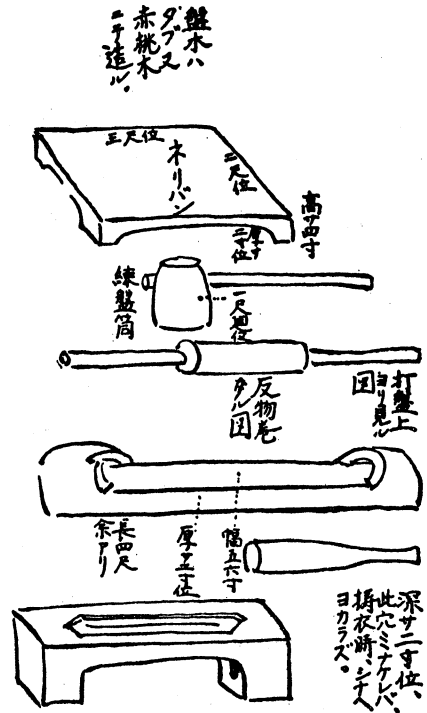


図 9

蜻蛉の羽のように薄い美しい御衣をお召しになって……

麻の初幹(殻)のこと
未詳語。下の白い部分か。

繊維を選び分ける

細かく織られた布

真芋でつくった馬の腹帯

又 芋の糸は
(真)
押し合わし遣り 手綱せ……

613 ……………久米のこいしのが
(1466) (糸) 真糸緘…… 真からむしの糸で緘した鎧

837 ……又 芋の糸は 真芋の糸は
水縄せ

以上のうち、349, 847, 983 は蕉布ではなからうか。特に983については、「したしらひよ」は従来未詳語とされている⁵⁾が、小野重朗氏は「下白芋」⁶⁾としておられる。この「した——」・「下——」を、茎の上方に対する「根元」としないで、茎の表皮^{うわかわ}に対する「内側」とするならば、芭蕉の繊維は内側になるほど細く、薄い上質の布が織れる⁷⁾ので、「初幹が」は麻よりも芭蕉ではないかと思われる。

V. あとがき

以上、大島本島に残る芭蕉の朝衣について報告したが、はじめにも述べたとおり 藩政期の奄美の朝衣は琉球の服制の導入であり、琉球の服制はさらに明・清との交流の上に成り立つことが確認された。また、日本本土からの影響についても見落すことはできない。奄美の朝衣は単に南日本の一地方の衣服ではなく、日本の被服文化史に関する多くの内容を蔵しているといえよう。今後はさらに、衣料のみでなく紡織具なども含めて、民族服の発展過程の研究を進めていきたい。

本稿は昭和48年10月14日鹿児島民俗学会で発表したものの一部である。

終りに、この調査に御協力下さいました名瀬市の大津家に厚く感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 4) 7) 小林孝子：“南日本の衣料について，第1報”，研究紀要，**23**，69-77，鹿児島大学教育学部（昭46，1971）。
- 2) 3) 小林孝子：“南日本の衣料について，第2報”，研究紀要，**24**，57-62，鹿児島大学教育学部（昭47，1972）。
- 5) 外間守善・西郷信綱：“おもろさうし”，637（昭47，1972）。
- 6) 小野重朗：“「おもろ」にみる恋歌の発生”，「文学」**41**，110（昭48，1973）。